

2020 年版のあとがき

昨年 11 月にアジア太平洋物理学会連合 (Association of Asia Pacific Physical Societies, AAPPS) とマレーシア物理学会が共催したアジア太平洋物理学会議のため、ボルネオ島のクチンに出かけてきた。私は AAPPS の事務局長とともにこの国際会議の副委員長も務めていたので、現地の下見も含め、マレーシア側の組織委員と連絡を取りながら 2 年越しで準備を進めてきたのである。それが 500 人の参加者を集め成功裡に終わったので、空港までの帰り道、ラフレシアの咲くという国立公園を訪れた。小学生の頃に読んだ本に「世界で一番大きな花」と出ていたのがずっと心に残っていたからである。

ラフレシアは不思議な植物である。葉も茎も根もなく、別の植物に寄生してそこから養分を取り、2 年間ほどかけて花を咲かせる。つまり生殖器官だけを持った生き物なのである。花は 3 日ほどで枯れてしまうので、なかなか見ることができない。私も大きめのキャベツくらいの形の蕾を見ることができなかったが、ジャングルのとば口のわずか数百メートルを一時半ほどかけて歩いただけのこの散策で、私は不思議な感慨に囚われた。

密林の木々に阻まれ、遠くに視界がひらけない一方、目を凝らして近くを見ると実に多様な生物に出会い、ある種の息苦しさを感じたのである。もしこのジャングルの中に十分な食物があれば、人類の祖先は、水槽の中の魚のようにこの閉じた世界の中で一生を過ごし、外の世界に触れることなく生涯を終えていたのではないか。つまり、文明が開かれるためには、人類がジャングルから平原に出て、遠くを見わたすことが必須だったのではないか——。そんなことを思った。

ジャングルの中では蔓草が伸びて木の上で葉を茂らせている。ターザンが木々の間を飛び移るのに使うのも、このような蔓だそう。スコールの時の雨宿りは岩陰でしないといけない。大雨が降ると木の上に寄生している蔓草が枝ごと落ちてくるので、大木の下でのんびり雨宿りをしていると、これに当たって死んでしまうからである。

このように、長い間、人間にとって死というのは突然訪れる現象だった。人間が死の恐怖を感じるようになったのは、文明がある程度発達し、人が

事故ではなく病気で死ぬようになり、自分があと何日くらいで死ぬか予測がつくようになった四千年ほど前からだという。それが宗教を産み出したのだ、ということを文学部に講演に来た英国人の死生学の大家に教わった。私はその話を聞いて、なぜ世界の大宗教がいずれも千年スケールの歴史を持っているのか、という長年の疑問に合点がいった。社会のインフラストラクチャーを作ったという点では、こうした宗教の教祖たちは、最近の世界のデファクトスタンダードを作ってきた IT 長者たちとは比較にならない大きな影響力を世界に対して持っているといえよう。

さて、この国際会議に先立って開かれた AAPPS の理事会で、私はこれから 3 年間、この連合の会長を務めることになった。宗教や文化的背景だけでなく、物理学の発展具合も社会の仕組みも多様な国と地域で構成されるこの連合を運営するのは一筋縄ではいかないが、わが国の物理学が国家財政の破綻によって毀損しないうちに、民主的で筋の通った運営をしている日本の物理学界のやり方がこの地域においてもデファクトスタンダードとして通用するようにしていきたいと思うところである。

2020 年 1 月

横山順一